

新刊紹介

S.マックレーン著、赤尾和男・岡本周一共訳

『数学——その形式と機能』(森北出版、1992年5月発行、8400円)

————— 駒木 泰

1992年に出版された本書は、新刊でもなく、経済学とも程遠い。しかし、考えさせられる著作に出会ったので、紹介してみたい。トポスに触れる機会があり、文献を探していたところ、本書に遭遇した。線形代数や微分積分は大学の教養科目で学んだが、トポロジーや圏論については皆目無かったからである。解説は、川が流れるように論理的であり、既存の概念も見方を変えるだけで理解できる。特に、集合を理解するのに非常に役に立った。集合を使ったいろいろな定義や定理は、多くは部分集合に関するものである。部分集合というと、集合に含まれる要素を集めて、新たに集合を作るものと理解していた。まず全体集合を考え、次にその中でど

のような集合にしたらいいかを、考えなければならぬ。

しかし、本書では、「集合とは集合の集合である」と解説する。部分集合が出てきた時点で、すでに集合が出来上がっていることになる。これで余計な手続きを踏まずに、次のステップに進める。発想の転換が物事を次に押し進めることを、実感できた著作である。微分積分の解説もそれらの概念の起源から解説しており、はじめに数式ありきの説明とは一線を画している。微分積分の講義が可能だった時代に、もしも本書に出会っていれば、この解説を参考としながら、受講者に発想の転換を促せたのかもかもしれない。

渡辺淳一著

『鈍感力』(集英社、2007年発行、1155円〈税込み〉)

————— 千葉 隆生

「鈍感力」という言葉は、小泉純一郎元首相が「政治家には鈍感力も必要である」と発言したことから有名になった言葉であり、2007年流行語大賞候補にもなった言葉であるが、本来は、渡辺淳一氏が書いた『鈍感力』という、現在では、100万部を超えるベストセラーとなっている本がきっかけである。普通、ベストセラーになったような人気のある話題の本は読まない主義のへそ曲がりの私は、「どうせ、どこぞの政治評論家が書いたひとりよがりの屁理屈を並べ立てただけの本だろう」とたかをくくって、読む気もなかったのだが、先日、たまたま訪れた本屋に

平積みしてあったこの本が目に入り、まあ立ち読みくらいならと思って、手にとって読んでみたところ、医学的な根拠に基づいた内容で、しかも読みやすいのである。それもそのはずで、著者である渡辺淳一氏は、元札幌医科大学の整形外科医であり、若い頃から、作家と医者との二足の草鞋を履き、後々、作家として一本立ちした異色の作家だったのである。彼の代表作には、あのドラマや映画にもなった『失楽園』もあり、いろいろな才能に恵まれた人なのだ。したがって、この本の内容もストレスと体の関係などを交感神経と副交感神経などを使ってわかりやす

く説明しており、非常に説得力があるのである。

具体的には、いくら才能があっても才能を開花させるには、それなりの努力と時間が必要であり、余り神経質であったり、人の言うことに左右されてばかりいては、才能が開花する前に、つぶれてしまうことも多いので、才能を開花させるには、人の批判に鈍感である「鈍感力」が必要なのだ、という第一章から始まり、大学病院にいた経験から、教授の文句をいつも「はいはい」と聞き流していた「鈍感力」のある同僚が一番出世したという話や、ストレスは交感神経を刺激し、血管を狭くするので、血流が悪くなり、血液をドロドロにしてしまうので、体調にも変調をきたしてしまうから、ストレスを感じない「鈍感力」が健康維持には欠かせないのであるということ、眠るということは、体力回復には重要なことであり、したがって、いつでもどこでも眠れるという環境の変化を敏感に感じない「鈍感力」が大事なのだということ、最近では、衛生的になりすぎて、ちょっとした雑菌にも体調を崩す人が増えているので、敏感すぎる体より、多少の雑菌には反応しない「鈍感力」のある人の方が生命力は強いのだということ、細かいことは気にせず、くよくよしない人の方がガンになりにくく、なったとしても、その後の治療の経過が良好であることなどが、医者としての経験からくる実体験などを通じて、わかりやすく紹介されており、実際の体験なので説得力もあるのである。

このように敏感なことだけが良いわけではなく、むしろ鈍感であることが大事なのだということは、男女の違いにも応用されている。例えば、生理的にも男女はまったく異なる生き物であるから、鈍感力にも違いがあり、血液の半分を失っても生きていた女性の方が、血液の1/3

を失っただけで死に至る男性より、「鈍感力」はあるということだとか、だからこそ、子供を生むという大事業は女性に与えられたのであり、男では到底耐えられない痛みであるということだとか、元々、女の子の方が昔は男の子より死亡率は低く、だからこそ、男の子の出生率が女の子の出生率より若干高いのだということなどが書かれており、医学的な根拠があるだけに説得力があるのである。

また、この「鈍感力」の重要性は、医学的なことばかりでなく、人生論や恋愛論にも応用されており、派手な服を着ることで有名な近所のおばさんに、お似合いですね、という皮肉を言い続けていたら、本人はそれを真に受けて、ますます派手になって、しかも、それが本当に似合うようになってきたという例や、仕事においても、余り細かいことに囚われず、嫌味や嫉妬、上司の叱咤にも、余りめげない「鈍感力」のある人の方が出世し、人間関係も円滑に過ごせることや、恋愛においても、振られても振られても何度でもアタックする「鈍感力」のある男性の方が、女性をゲットする確率が高いのだということなどが、述べられている。ただ、ここまでくると、どこまでが実体験で、どこまでが机上の空論なのかわからなくなってくる。

確かに、複雑過ぎる人間関係の中で生きなければならぬ忙し過ぎる現代において、ストレスを抱える人は多い。また、人間関係をうまく結べなかったり、ストレスをうまく解消できないガス抜きが下手な人も増えている。そういう人や自分で神経質だなどと思う人は、この本を読み、鈍感であることを見直して、「鈍感力」を身につけ、社会の中で、うまくやってゆく方法を見つけてみてはいかがだろうか。